

三位一体の主日

ヨハネ 16・12-15

2022.6.12

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日は三位一体の主日というごミサをお捧げしています。わたしたちが「父と子と聖霊の皆によってアーメン」とお祈り最初に言う、また栄唱で「栄光は父と子と聖霊に」と唱えますけれど、神様が父と子と聖霊なんだ、そう呼べばいいんだ、あるいは、三位一体なんだってということは、人間が神様ってどういう方なのかって思索を重ねて辿り着いた、到達した結論ではないですね。神様がわがわたしたちに、そして最後にはイエス様が完全な形で、ご自分はどのような方なのか、そしてわたしたちはその神様にどのように呼びかければよいのかを教えてくださいました。教会は、わたしたちは信じている。そういう意味で、神様がご自分をわたしたちに明かしてくださいました。神様がわたしたちと出会うために、ご自分のほうから、ご自分がどのような方か、どのようにお呼びすればよいか明かしてくださいました。

もちろん、神様が明かしてくださいました内容をどのように表現すればいいのか、どのように受け取ったらいいのかってということで、教義という人間のがわの努力も歴史の中であったわけですが、一番は神様のほうから、ご自分がどういう方なんです、どのように呼べばいいのかを教えてくださいました、ということですね。だから、わたしたちが神様に「父と子と聖霊」と呼び掛けることができること自体が、わたしたちと神様がつながっていることの一つの証し、しるしなわけです。

だから、今日の主日というのは、神様が自己開示、自分のほうからわたしたちに明かしてくださいました、ご自分がどういう方か、どういうふうにお呼びすればよいか教えてくださいましたことを感謝する、そういう趣旨だと思います。

と同時に、わたしたち自身もお互いに出会い、お互いを明かし合うことができるように、わたしたち自身の関係も、ご自分を明かしてくださいました神様とわたしたちの関係と同じようなものになっていくように、お互い同士が自分というものを明かし合うことができる、打ち明け合うことができるように願う。そういう日でもあると思っています。

わたしたち同士も、そういう意味では、互いに名前を知っているということはすごいことです。だから、もっとそれについて感謝すべきことなのかもしれません。互いにどう呼べばいいかを知っているっていうのは、関係があるっていうことのしるしだから。そして、それだけじゃなくて、自分が大切だと思う人には、名前以上にもっと自分のことを知ってもらいたいし、相手のことも知りたい。関係が深まっていく。

でも、わたしたちは自分のことを打ち明ける、あるいはどういう者かということを示す、明らかにするっていうことが怖い、恐れるという側面もあります。本来自分がどのようなものであるかを示すならば、軽蔑されちゃうんじゃないかな、拒絶されちゃうんじゃないかな、付け込まれるんじゃないかな。そういう恐れがあるわけだし、そして、実際にそういうことはあり得る、経験もしている、と言ってもいいかもしれません。それが、まだ完成していないわたしたち、この世界の間人同士の関係の現実でもあります。

だから、そういう恐れに囚われて、意識してか無意識のうちにか、自分のことを示すときに偽りの自分を示す、本当じゃないのに。あるいは、今の言葉で言うと「盛る」っていうのかな、自分をもっとすごい者なんだとか、あるいは、こういうことを成し遂げたんだとか、誰々の知り合いだとか。相手からすれば、そういうことを通してあなたを知ることはできないんだけどな、あなたが何が好きなのかどういう人なのかを知りたいんだけどなっていう。だけど、自分はこれだけの者なんだっていうことを、いろんな外側のことを、そしてそれをもうちよっと大げさに言いながら示してしまうっていうことはあるんじゃないかな。自分を軽んじれば、拒絶すれば、ひどい目に合うんだぞっていうような、威嚇じゃないけど、そういうような、お互い同士知り合うことができない情報を並べて立ててしまう。それがためにかえって相手との関係が遠ざかっちゃう、相手を遠ざけてしまう。やっぱり、それは恐れからき来ますね。恐れなんですよね。

そういう恐れに覆われているわたしたちの心。だけど、その恐れのもっと内側にある心の一番深いところでは、お互いに知り合いたいし仲良くなりたいっていう、神の子どもとしての、それは神様がくださった聖霊の望みというか、お互いに知り合いそして仲良くなっていくという聖霊の促しというか、聖霊のうめきというか、それが見出すことができると思います。

こういう祭日のときには香を使います。典礼にはメリハリが大事だから。今は地区ごとだから皆さんミサは1か月に1回ですが、でももうこれで3週連続

で使って、来週もキリストの聖体の祭日だから使います。その香の中で、祭壇にも献香するしご聖体にも献香しますけども、あとで奉納のときに侍者の人が司祭に献香したり、前に回ってきてみんなにも献香する。それは、重々しい感じを出すためだけじゃない。それは、一人ひとりの中に聖霊がいらっしゃるっていうのを、その聖霊に対してわたしたちは礼拝する、つまりは尊敬して頭を下げるっていう、そのことを思い出すために、人間に対しても献香しているわけです。

一人ひとりの中に聖霊がいらっしゃる。だから、その促しによって、わたしたちは本当に知り合いたいし、仲良くなりたいですよね。でも、そのためには乗り越えなきゃいけないことがあります。それは、お互いの恐れだし、そして、罪によって傷つけ合ってしまうという関係ですよ。

わたしたちは十字架のイエス様をいつも仰ぎ見ます。十字架のイエス様は、ご自分を証しし、でもそれによって拒絶された姿。拒絶されても、でもイエスのほうは拒絶に拒絶では返さないで、いつも手を開いていらっしゃるし、死と復活、復活して戻ってくる。拒絶されても、イエス様のほうから出会おうとする。神様のほうからわたしたちに出会おうとする。その努力というか、その願いは消えない。いつもで会おうとされるんだということを示してくださっている。だから、わたしたちはその十字架を見るたびに、お互い同士打ち明けたものを拒絶し、あるいは傷つけ合うことを通してお互い同士傷つけ合うことでイエス様を二度と十字架に付けることをしないんだという思いを新たにしなければいけないと思います。また、イエス様と同じようにわたしたちも自分を他の人に開いていく、そのことをわたしたちのがわから始めて、人間と人間の間を繋げていく、その勇気もいただきたいと思うんです。

今日、三位一体の主日で、神様がわからご自分がどういう方か、そしてどういうふうに呼べばいいのか、明らかにしてくださったっていうことを記念するわたしたちが、神様に強められて力をいただきながら、恐れに打ち勝ち、お互い同士も本当の意味で、神様から頂いた自分自身を明らかにし合って、渡し合い受け取り合う関係に導かれますようにと、その助けを願いながら、このごミサをお互いのためにお捧げしたいと思います。